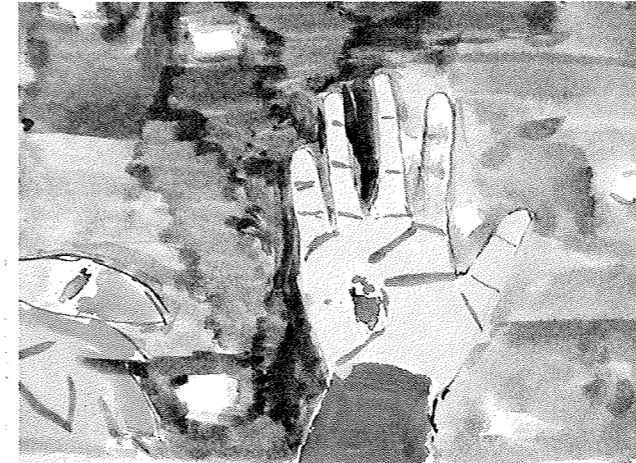


水～いたち川～ 小菅ヶ谷小学校

4年生の学習は「水」と関連するものが多くあります。社会科では～健康なくらしとまちづくり～の中で学習する「水はどこから」や理科の～自然の中の水～など。そこで、4年生では一年間を通して、自分たちの生活や学習と「水」を関連させながら、環境について考えていくことにしました。

上郷森の家での体験宿泊学習



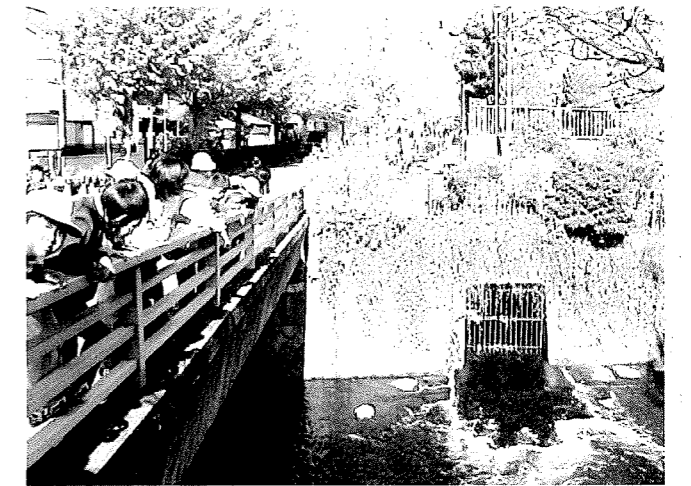
6月12日(水)

午後の自然観察の森での自然観察は途中から激しく雨が降ってきたため、残念ながら途中で切り上げました。でも、日暮れからホタルの観察をする頃にはほとんどあがり、闇に浮かぶ幻想的なホタルの光に子どもたちみんな感動しました。体験学習に向けて、ホタルの生態を調べた子たちもいました。いたち川の源流に近いところで、水が集まり川になっていくようすがわかるとともに、ホタルの見られるきれいな川にしていかなければ、と感じたようです。

下水処理場からいたち川へ

11月18日(月)

「私たちが使った水はどこへ行って、どのようになるんだろう？」の答えを調べに、栄下水処理場を見学しました。下水処理場で浄化された水がいたち川に合流する(警察学校前)ようすも見学しました。自分たちの使った水といたち川との関係についてよくわかりました。



すすかけフェスティバル「いたち川」

総合的な学習の時間は、『いたち川』を大きなテーマにして、いたち川へ何回か出かけ、「ごみ」「生き物」「植物」「歴史」「くふう」などについて調べました。土木事務所の和久井さんから教わったり、ボランティアの方から話を伺ったりして自分たちのテーマについて調べ、まとめたことを「すすかけフェスティバル」で発表しました。

～いたち川について調べる前に、よくいたち川に行きましたが、置いてある石もそんなに気にしていませんでしたが、調べたり和久井さんから教わったりして、その理由がわかりました。～ わたしたちのグループは川の工夫について調べました。調べてみると、思っていたよりずっと多くの工夫がしてあることがわかりました。中でも鳥のために、わざと草を刈らないで巣が見えないようにしてあることを

知って、生き物たちのために考えられていることに感心し、大切にしていこうと思いました。～



発行：独川OTASUKE隊 (いたちがわおたすけたい)
 OTASUKE隊事務局：栄区役所区政推進課企画調整係 〒247-0005 横浜市栄区桂町303-19
 TEL 045-894-8331 FAX 045-895-2260
 栄土木事務所下水道係 〒247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷1-6-1
 TEL 045-895-1411 FAX 045-895-1421
 (お便り・お問い合わせはこちらまで)

いたちがわらばん

通刊21号

鮠川・独川・川原番・瓦版

03春号



版画 宗森英夫

桂橋から下流をのぞむ

山と川と村の暮らし

いたち川の水はどこからくるのでしょうか。降った雨が流れてくる、地下水が湧き出てくる、処理場から流すなどありますが、一五〇年程昔は天然水ばかりで処理水はありませんでした。

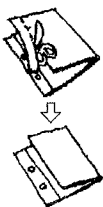
今、栄区で生活に使う水はほとんどが浄化処理された水で、水道水やボトル入り水等買っていますが、天然水しかない時代はどんな暮らしが想像できますか？
 山や川は村の暮らしに深くかかわっていて、みんな大切に守り手入れを怠りませんでした。明治十年頃現在栄区になっている地域には、東谷(ひがしやと)山、富士塚山、皆城山、横向山、長倉山、中道(なかつち)山、網張山、大平山、水口山、飛石山、神明山、坪入山、芝後山、上野かみの山、高田山、飯盛山があり、猿田川、鮠(いたち)川、荒井沢川、大内川、柏尾川、関谷川、猪山(いのやま)堀、矢沢堀、椎郷堀、堰堀、谷堀、西堀、中堀、隅田堀、長谷ながや堀、五反田堀、窪堀があったと当時の村々の記録に残っています。山や川にはいくつも呼び名をもつものもあつたようで猿田川は上川、大内川は下川、いたち川の「水之口」があつた後ろの山は、水口(みづぐち)山で「ふじやま」とも呼ばれていたそうです。

今年二月一五日に開園した「本郷ふじやま公園」は、その「ふじやま」に由来して名づけられました。江戸時代後期に建てられた村の「古民家」が移築されており、お年寄りの方々に話をきかせてもらうことこの違いがいろいろわかり、暮らしのヒントも見つけられそうです。

(つづき)

切りとり線

この部分を
取り
切ると
便利です。



いたち川の「河川改修による環境変化に伴う生物的・社会的影響に関する研究」の紹介

東京農工大学大学院 農学研究科留学生 李 成炫



私は韓国から留学して川の勉強をしている学生です。韓国では、1988年にオリンピックを開催するにあたり、ソウル市内の下水道の普及工事を急いだため、市内を流れる清溪川(チョン・ゲ・チョン)を暗渠化して、そこに汚水を流し処理場に導きました。近頃、この川を昔の姿に戻し清流を蘇らせようと、汚水を分離し植物を復元させ自然を取り戻すことが検討されています。そこで川の大きさが類似している、「いたち川」の取り組みに注目し韓国KBS放送がとりあげて放映もしています。

私は、日本の河川改修について研究していく中で、全国的に環境復元の優良事例とされる「いたち川」と出会い、河川改修による環境の変化とその生物的・社会的影響を調査・考察しました。

1. 研究の方法

- ① いたち川における今までの河川改修による河川環境の変化と、その生物的・社会的影響についての調査。
- ② 1970年代から現在までの生物調査の結果をもとに変化を整理すると共に、いたち川周辺を生活圏とする市民の、川に対する意識をアンケート調査により分析した。

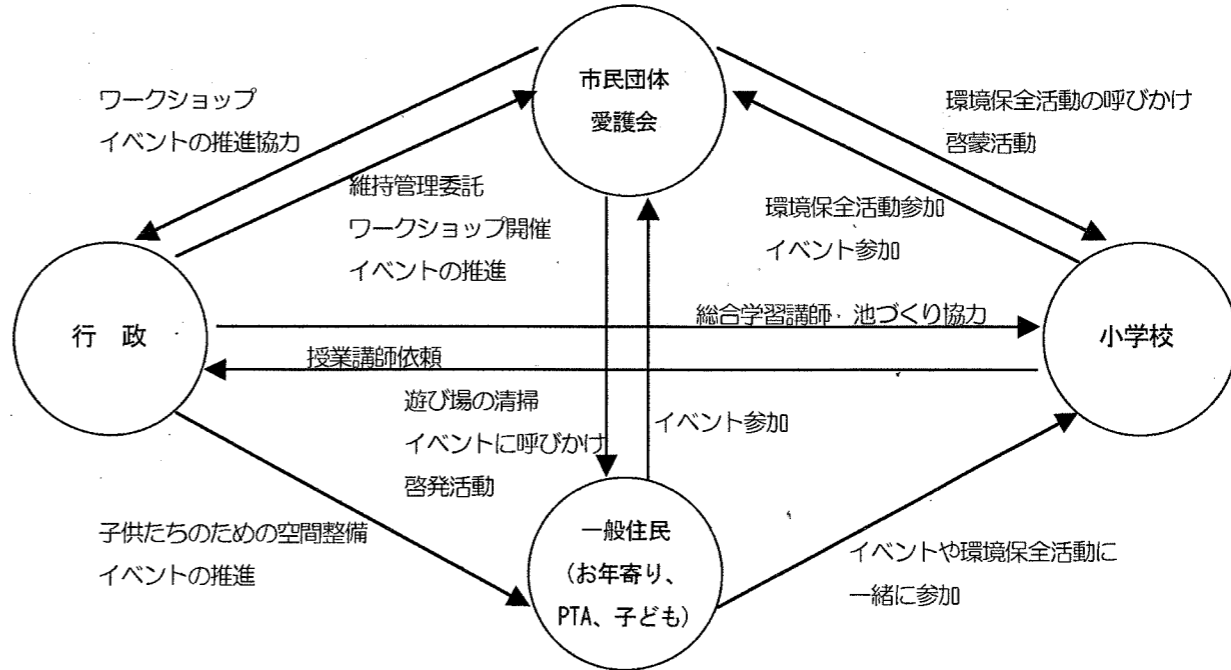
2. 結果 (紙面の制約がありますので、一部のみ紹介します。)

●いたち川改修による河川環境変化および河川と住民との関わりの変化

いたち川流域は1950年代までは、農業が中心の営みであり、川は農業用水であった。子供たちにとっては魚とりや水遊びの場であり、またタンパク源として魚やえびを捕っていた記録がある。しかし、都市化により人口が増えるとともに水質が悪くなり、住宅地化で樹木がなくなって降雨が河川へ速く到達して洪水が頻繁に起こるようになった。そうした洪水を防ぐために1970年代にコンクリートによる河川改修が行われると、さらに水質は悪化し、川沿いにはフェンスが張られ人と川は分断された。

しかし1982年から始まった低水路整備により河川環境が良くなると共に、住民の環境意識も高まった。同年より住民によるクリーン作戦が始まり、1987年からは行政や市民団体による環境保全活動が盛んになった。(いたち川と親しむ会、いたち川 OTASUKE 隊) 1997年より現在は、いたち川は、市民のレクリエーションやウォーキングの場となり、またボランティア活動としての水辺愛護会が結成され、さらに小・中学校の総合学習の場として多くの人々に利用されている。

このように流域規模のパートナーシップが形成されているが、その過程をまとめると次のとおりである。



●アンケート調査の結果

いたち川では、河川改修事業(低水路整備、川辺の道、ふるさとの川整備)が行われてきており、それによる河川環境の変化を住民がどう評価しているかをみるため、アンケートをおこない、住民の地域意識やコミュニティに川がどのような影響を与えているか検証してみた。

アンケート調査は2002年12月21日から2003年1月初旬にかけて河川沿いの通行人、住民を対象に80部を配布し、回収は63部(回収率:79%)であった。集計には使えないと判断した3部を排除した。

それによると、現在いたち川の河川環境で高く評価されているのは、「生物が多い」「緑が多い」「近づき易さ」といった点であり、評価が低いのは「水深が浅い」「ゴミが多い」という点であった。また回答者の80%以上が、住民による利用や環境保全活動が、地域コミュニティ形成に影響を与えていると答えている。

3. 考察

河川改修は、単に洪水を減らしたり流水を変化させただけでなく、河川と人間との相互作用に変化をもたらして、生物や住民の生活環境に大きな影響があることが解った。

また、住民による河川の利用や河川環境保全活動により、流域規模のパートナーシップが形成されつつあると考えられる。(この原稿は、本人が帰国されたため、再編集をさせていただきました。)

切りとり線

リポート No.6110

独川 OTASUKE 隊入隊

一九七三年、東横線の日吉から本郷台に引越してきました。もう三〇年経ちます。当時の独川は、メタンガスがわき、異臭を放っていました。

給料取り生活から解放された一昨年の夏、城山橋から新橋にかけて独川沿いを散歩したとき、エッと驚きました。独川が臭わない、水がキレイだ、人が川岸を楽しそうに歩いている。ほんとうに聞かされた話ですが、こんなのかな風景に初めて気がつきました。

早速、栄第一下水処理場に伺いました。七二年、独川城山橋で測定した水質・BODの数値は、三・一・五であり、二五年後の九七年に測定したそれは三・五、なんと十分の一に改善されています。ちなみに、横浜の目標値は五、国の基準値は一〇であります。七二年当時の栄区の下水道普及率は数%であったが、九七年には普及率が九九%に達していたことが、改善の理由の一つだろうと分かりました。

栄土木事務所に伺いました。この二〇年間、独川は多自然型工法で改修が行われ、国内外からの見学者が絶えないほどの横浜一のきれいな川に蘇った、と説明を受けました。また八二年にはボウフラ退治のため、五万尾のコイを放流したと聞きました。

「横浜下水道史」によると、六八年、栄第一下水処理場建設に反対運動をしていた本郷地区連合町内会は、次の条件をつけて建設反対請願を取り下げました。

【独川の徹底的改修を行い日雨量二〇〇mm程度の降雨量で洪水が起こった場合、氾らんがなくなることから処理場の処理水を放流すること、その他】

このことは、独川がキレイになるプロセスにおける、忘れてはならないマイルストーンだと思います。栄第一下水処理場工事は一〇年後の七八年から始まり、八五年二月竣工式が挙行されました。そのとき、一万六〇〇〇m³/日の下水処理が行われました。

危険にさらされていた独川をどうにかしなければと憂慮していた連合町内会の努力は見逃しできない大事なことだと思えます。現在、独川は、川沿いの各地域の皆さまからなる水辺愛護会によって温かく守られています。

そういう意味で、独川を蘇らせたのも、守り抜くのも地域住民の市民力によるのが大きいと感じ入りました。そんなこともあって、この川について勉強させてもらおうと思ひ、独川 OTASUKE 隊に入隊したワケであります。

どうぞよろしく願ひいたします。(みっちゃん)

河川用語のまめ知識 その五 BODとは?

河川水質を測定、評価する際の項目としてBODがよく用いられます。例えば、昨年タマちゃん突如姿を見せた鶴見川は、国土交通省の水質調査により全国の一級河川のうち三番目にBODが高い川と発表され、一時話題になりました。

さてBODとは、生物化学的酸素要求量といい、水の汚れ(有機物を微生物の作用で分解するとき必要とされる酸素の量)をいいます。従って、BODが高いということは水の汚れが多い、水質が悪いということになります。

今のいたち川のBODは上流の権現橋で1.0 mg/l、下流のいたち川橋で4.2 mg/l(横浜市環境保全局二〇〇一年度調査による)となっています。

BODが8 mg/l以下で水辺の散策ができる、5 mg/l以下で水遊びや釣りができる、3 mg/l以下でホテル観賞ができるとされ、それぞれ権現橋では3 mg/l以下、いたち川橋では8 mg/l以下が水質の目標とされています。(LCS)